地質ニュース555号，58－63頁，2000年11月
Chishitsu News no.555, p.58－63, November, 2000

石の俗称

花札の石

遠藤　祐二[1)]・加藤　碩一[2)]

花骨牌（花カルタ，花札）は「花合わせ」の遊びに用いる絵札のことですが，「花札」というとすぐに「博打」を連想し，とかく石部金吉族の眉をひそめさせるものと相場が決まっているようです．確かに，江戸時代の中頃に禁止令まで出された「花札賭博」は，今日まで一部の人達の間に根強く受け継がれていることは事実です．しかしながら，花札の図柄はなかなかに風雅で，遊び方にも興味深いものがあり，健全な家庭ゲームとして，もっと市民権を得てもいいのではないかとも思われるところです．最近はパソコンゲームにも取り入れられているようですが，画面相手ではイマイチ味気ない感じがします．

さて，ご存知のように（あるいはご存知でないお固い方のために），花札は正月から極月までを象徴する12種の花（植物）を取り上げ，それぞれにふさわしい4枚の絵柄を配した計48枚の絵札から成り立っています．選ばれた花は正月から順に，マツ（松），ウメ（梅），サクラ（桜），フジ（藤），アヤメ（菖蒲），ボタン（牡丹），ハギ（萩），ススキ（芒），キク（菊），モミジ（紅葉），ヤナギ（柳），キリ（桐）です．また，松に鶴（つる）・梅に鶯（うぐいす）を始めとするそれぞれに相応しい景物も添えられ，季節感への配慮は心憎いばかりです．

では，これらの花の名に因む石があるのでしょうか．「石の俗称辞典」を開いてみることにしましょう．

松傘石（まつかさいし）

ウニの仲間の化石にシダリス（またはキダリス）というのがあります（写真1）．中生代に栄えたこのウニは，寿司ネタとしてお馴染みのムラサキウニやバフンウニなどとは似ても似つかない棍棒のような太い棘を持っています．荒い潮流の中で個体を流されないように，このような形態を備えるようになったものと考えられています．この棘の部分の化石がその形から「松傘石」（マツボックリは松毬または松笠と書く方が正しいようです）と呼ばれ，ジュラ系の鳥の巣石灰岩の中に出ます（第1図）．特に和歌山県日高郡由良町や高知県高岡郡佐川町付近のものが有名で，昔は風化した石灰岩からこぼれ落ちた化石をたやすく採取することができたそうです．因みに和歌山県下では「梅干し石」と呼ぶのが普通で，さすがに梅干しの名産地だけのことはあります．また，東京都五日市付近の石灰岩からも同種の化石を産出し，この地方では「榧（かや）の実石」と呼ばれています．榧はクリスマスツリーに使われる樅（もみ）に似た常緑樹で，最高級の碁盤・将棋盤の素材として珍重されています．その実は茹でたピーナッツのような舌触りがして，なかなかに美味しいものです．子供の頃に食べた思い出の

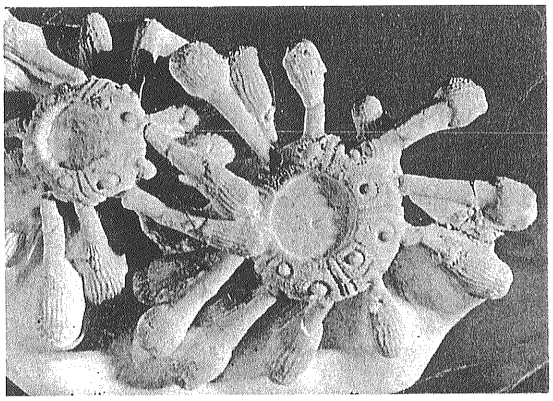
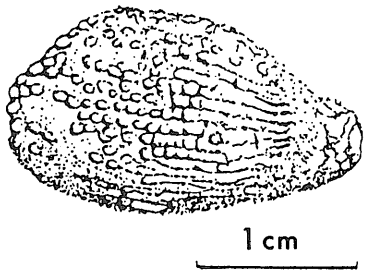


写真1　シダリスの化石．大英博物館（自然史）所蔵標本．同館記念絵葉書（地質調査所元職員，佐藤喜男氏提供）による．写真の左右長約9cm．

1）地質調査所　地質標本館
2）地質調査所　次長

キーワード：石の俗称，松傘石，松葉石，梅花石，桜石，菖蒲石，牡丹石，月のお下がり，紅葉石

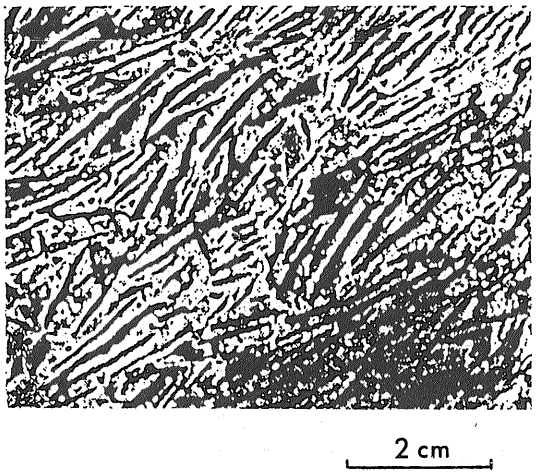


第1図　シダリスの棘の化石．和歌山県日高郡由良町．松傘（笠）石・梅干し石・榧の実石などと呼ばれる．

ある筆者らには，渋皮に包まれた榧の実の形が，この化石の見かけには最も似つかわしいように思われます．

松葉石（まつばいし）

南部北上山地の一画，宮城県気仙沼地方には古くから「松葉石」の名で親しまれている化石が産します．古生代二畳紀に栄えたフズリナ（紡錘虫）の化石で，長さ2cm内外，太さ2mm以下の細長い棒状の形をしています．この化石を多量に含む石灰質砂岩からフズリナが抜け落ちると，ちょうど松葉の抜け跡のような模様が残ることが，その名の由来です（第2図）．学名を＜パラフズリナ　マツバイシフジモト＞といい，日本情緒豊かなマツバイシが世界的に認知されているのは喜ばしいことです．



第2図　パラフズリナの化石を含む石灰岩．岩手県東磐井郡川崎村．松葉石として親しまれている．

古生代の石炭紀～二畳紀を中心に繁栄したフズリナの仲間は，種類が豊富で進化が早く，分布も広く大量に産出することで，地質時代を区分するのに大切な化石（示準化石）の一つになっています．

梅花石（ばいかせき）

水石（すいせき）または盆石（ぼんせき）として，石を愛でる人たちの間に絶大の人気を博するのが「梅花石」と「菊花石（きっかせき）」でしょう．黒地に白く五弁の花模様を散らす渋い梅花石と，赤・黄・緑などの地色に大輪の花を咲かせる華やかな菊花石とは見た目にも誠に対照的で，愛好家の垂涎の的となっているようです．

後で記すように，菊花石または菊に因む石のでき方は様々ですが，梅花石の起源はただ一つで，古生代に栄えたウミユリ（海百合）の化石が泥質の石灰岩や輝緑凝灰岩の中にその姿を現したものです（写真2）．ウミユリは棘皮動物に属し，同じ仲間のヒトデのように，五回対称に近い構造を身体の軸に持っています．このことがウミユリの茎の部分の断面の化石を，あたかも開いた梅の花のように見せている理由なのです．化石の中には丸い竹輪（ちくわ）状の断面を示すものも多く，五弁状の「花」に対して「蕾」と呼ばれます．ウミユリの花や蕾に加えて，同時代に棲息したサンゴ類の化石などが

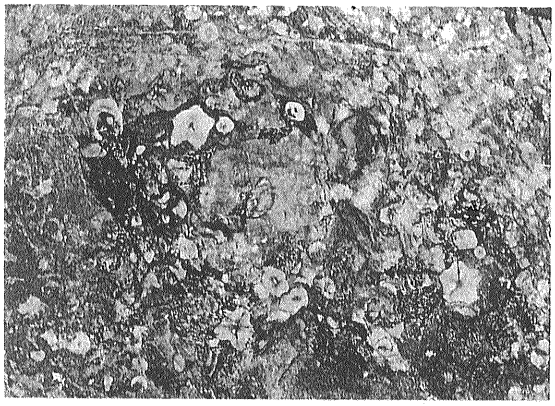


写真2　ウミユリ化石を含む輝緑凝灰岩（梅花石）．福岡県北九州市門司区青浜．写真の左右長約15cm．

微妙に共演することにより，梅に鶯を彷彿させるような珍石「梅鶯石（ばいおうせき）」などが生まれることもあるそうです．

古生層の石灰岩に含まれるウミユリの化石は各地に産しますが，梅花石と呼べるものは少なく，福岡県北九州市門司区白野江から青浜にかけて産出するものが最高とされています．青浜の地は，都を追われた菅原道真が太宰府への途路に立ち寄った所とされ，折しも満開であった梅の花が，道真の心境を思いやって一面に落花し，以来この地の「梅花石」に化したとの伝説が残されています．

桜石（さくらいし）

泥質岩が熱変成作用を受けるとホルンフェルスになります．この過程で再結晶する鉱物の代表例は菫青石（きんせいせき・コーディェライト）です．小さな結晶が球状に集まった場合に「疣石（いぼいし）」と称せられることは前回（本誌no.547）に触れました．結晶がより大きく成長する条件の下では，六角柱状の外形を示す双晶体を形成します．菫青石は斜方晶系の鉱物で，本来は伸びの方向に菱形の断面を持つ柱状の結晶になります．しかしながら，軸率が菱形の外角に60°・120°に極めて近い値を持つ菫青石は，変成作用のような厳しい環境の下では，疑六方晶系の三連双晶として成長した方がエネルギー的に有利で，その結果このような外形をとるに至ったものと考えられています．断面には双晶の境界が明瞭に現れ，桜の花弁が開いたように見えるところからその名が生まれました（写真3）．菫青石本体は後に変質して絹雲母などに変わり，雲母鉱物特有の真珠光沢や淡い紅色を呈し，その名に恥じない風合いを添えています．

桜石はホルンフェルス以外に雲母片岩の中にも存在し，産地は各地に亘ります．最も有名な産地は京都府亀岡市で，稗田野の柿花（かいはな）天満宮，奥条（おくんじょう）の桜天満宮などが知られています．ここの桜石は風化により母岩から外れ易く，直径1cmほどの個体として取り出すこともできます（写真4）．

松，梅，桜と，ここまでは順調にきましたが，次の藤でハタと行き詰まってしまいました．フジの花に因む石はないようなのです．華麗に垂れ下がるフジの花房は，石に見立てることの想像力を遙かに超える存在だったのでしょうか．ここは潔く諦めて，次へ進むことにしましょう．

菖蒲石（あやめいし）

紀伊半島から四国にかけて，中央構造線に沿って分布する和泉（いずみ）層群は，中生代上部白亜系の海成アルコース砂岩から成り，「和泉石」として石材にも利用されています．この和泉砂岩の中には，コダイアマモの化石とされる炭化した藻類植物の印痕を持つものがあります．その中でアヤメの葉茎を思わせる形のものを含む砂岩が，菖蒲（アヤメまたはショウブ）石の名で呼ばれています（第3図）．

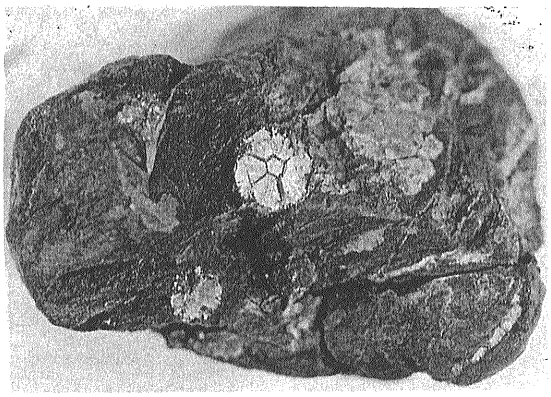


写真3　風化したホルンフェルス中に咲く桜石．京都府亀岡市湯ノ花．写真の左右長約7cm．

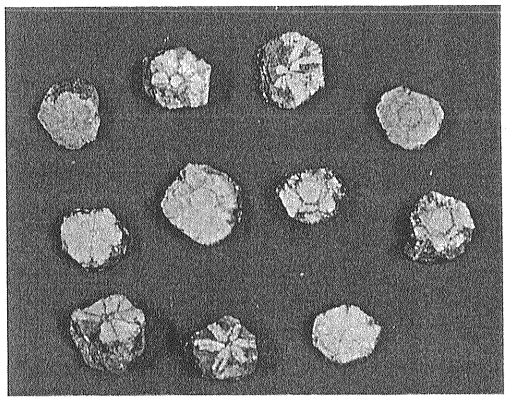
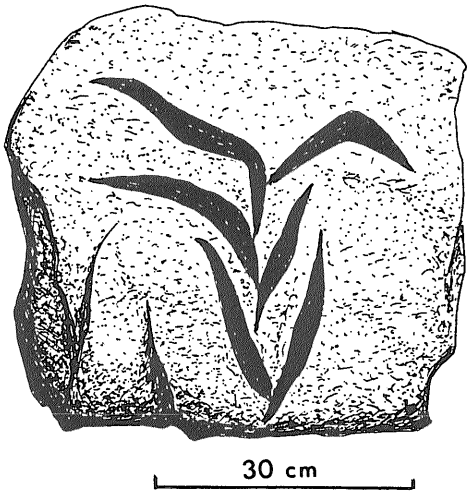


写真4　母岩から分離した桜石．写真の左右長約10cm．

ややズングリ型のは「オモト石」，直線的で長い（50cmにもなる）ものは「正成の槍石」の異称を持っています．

コダイアマモは現生のアマモの祖先型で，温暖で塩分の少ない河口や入り江の浅場に群生していた水生植物と考えられています．ただし，アヤメ模様の原因は化石ではなく，何らかの生痕であるとする説もあり，決着はついていないようです．

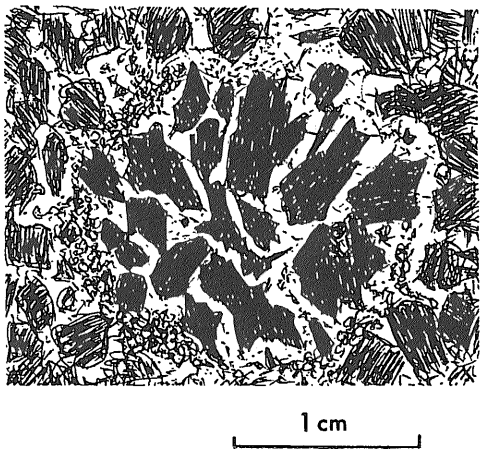


第3図　アヤメ（菖蒲）模様を浮かべる和泉砂岩．石材用岩塊写真の一部を模式的に描画．高知県とだけで詳細な産地は不明．

牡丹石（ぼたんいし）

福島県郡山市の東隣に位置する田村郡一帯には，阿武隈山地に属する古期花崗閃緑岩に含まれて，はんれい岩の小岩体が点在しています．中粒で緻密な岩質は石材としての品質に優れ，いわゆる「黒御影（くろみかげ）」の最高級品とされています．中でも黒地に白と金色の斑点を持つ黒石山の角閃石斜長石はんれい岩は「浮金石（うきがねいし）」と呼ばれて全国的に有名です．浮金石と全く同質で，磨いた面にボタンの花が開いたようなぼかし紋を浮かべるのが「牡丹石」で，黒石山の北方にある移ケ岳に出ます．

浮金やボタン紋の原因は岩石中に含まれている磁硫鉄鉱にあります．岩石を磨いた面ではこの鉱物が強い金属光沢を放ち，大粒のものは石の面に金が浮いているように見え，微細な粒が円く配列するとボタンが咲いたような風合いを醸し出すのです．とはいえ，ボタンの花模様は非常に微妙で，研磨面の写真ではとても表現することができません．ボタン模様を強調したスケッチ（第4図）で想像を巡らせてください．金属鉱物としては，磁硫鉄鉱の他に少量の黄鉄鉱，微量の黄銅鉱も含まれています．



第4図　角閃石はんれい岩の研磨面のボタン花模様．模様を強調するため周囲のトーンを実際より弱めてある．黒いのは角閃石，白い部分は斜長石，小さな散点は磁硫鉄鉱．福島県田村郡船引町．

次は七月の萩ですが，残念ながらハギの花に因む石はありません．では，萩の札に登場するイノシシはどうかというと，これまた見あたらないのです．「猪石」とか「猪岩」とかはありそうなので随分捜したのですが，結局見つけることはできませんでした．

ススキはイネ科の多年草で「秋の七草」の一つですが，その名を冠した石も見あたりません．八月を表すこの札は，むしろ中秋の名月を配した絵柄の方が印象的で，「月に雁」あるいは「坊主」とも呼ばれ，ススキが主題であることを知らない人が案外と多いのではないでしょうか．

月に因む石で思い浮かぶのは「月長石（げっちょうせき，ムーンストーン）」ですが，これは鉱物名（宝石名）として認知されているので俗称の範疇には入りません．俗称にふさわしい石は「月のお下がり」でしょう．また「坊主石」というのもあります．

月のお下がり(つきのおさがり)

日本では，新第三紀中新世中期の地層から，各地でビカリヤというウミニナ科に属する巻貝の化石を産します．化石の殻は普通は石灰質ですが，時として全てが珪酸質で置き換えられ，非常に硬く艶のあるものに変わることがあります．これが月のお下がりで，月に住むウサギの糞が空を舞い降りながら石になったとの伝説が名前の由来です．岐阜県瑞浪市月吉の瑞浪層群からは，オパール化した大変美しいビカリヤが出ることで有名です(写真5)．

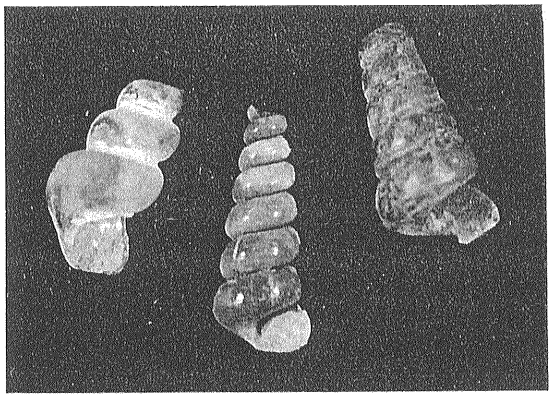


写真5　オパール化したビカリアの化石(月のお下がり)．岐阜県瑞浪市月吉．写真の左右長約15cm．

さて，梅花石のところで触れたように，キクの花に見立てられる石の種類は多く，岩石・鉱物・化石の全てに及びます．その呼び名も菊花石・菊目石・菊紋石等々これまた様々で，石の種類と呼び名との間に混乱の起きることもしばしばです．ことほど左様に，キクは日本人にとって身近で好ましい花なのだということでしょう．そこで，キクに因む石のアレコレは，交通整理も含めて次回にまとめて紹介することにしたいと思います．

紅葉石(もみじいし)

四国の最高峰石鎚山の南にある面河渓(おもごけい，愛媛県上浮穴郡面河村)は，新第三紀の面河酸性岩類を面河川が刻んだ景勝の地で，特に紅葉の季節が美しいとされています．散り敷いた紅葉が朽ちるのを惜しんで石と化したかと見紛うのが紅葉石で，面河渓の名石として知られています．

面河酸性岩類は主に細粒の花崗岩ないし花崗閃緑岩からなり，その中の割れ目一面に黒色の電気石(トルマリン)が平面的放射状に晶出していることがあります．これが紅葉石の正体で，一連の火成活動の最末期に，花崗岩類の割れ目を充填したアプライトやペグマタイトに伴われて結晶化したものです．とすれば，面河渓だけが紅葉石の産地とは限らないのは当然のことです．黒い電気石を含むペグマタイトは各地に有り，放射状の結晶群もしばしば見受けられます．写真6に示したのは京都府大谷鉱山(亀岡市鹿谷)に産する例で，鉱床生成に関連したとされる花崗閃緑岩の割れ目を埋めるアプライト脈の中にできた電気石です．電気石には赤や緑の結晶も知られ，色鮮やかで透明な石は宝石の仲間に加えられます．広い世界の何処かには，文字通りの赤い紅葉石が人知れず眠っているのかも知れません．

写真6　平面放射状に成長した電気石を含むアプライト脈(紅葉石)．京都府亀岡市鹿谷．写真の左右長約10cm．

十一月を象徴する柳の札は「雨」の呼び名の方が通りが良いようです．この季節に特有の秋霖(しゅうりん)をヤナギの木に託したのだとされています．秋の長雨に揺らぐヤナギの風情が，花々の失せた時期の風物として風流人の心を捉えたことが，選定の理由になったのでしょうか．絵柄に描かれる脇役も多彩で，全ての花札の中で唯一の人物である小野道風，それとカエル，ツバメに加えて鬼までも登場します．

石の方でも，肝心のヤナギに因むものは見あたりませんが「雨乞石（あまごいいし）」，「蛙石（かえる・かわずいし）」，「燕岩（つばくろ・つばめいわ）」などがあり，脇役が健闘してくれています．「鬼」にまつわる石や岩に至っては，全国各地で枚挙にいとまがありません．これらについては「石の俗称辞典」をご覧ください．

一年のしめくくりとして，十二月の花札には尊い植物とされるキリが選ばれました．デザイン化されたキリの花葉模様は，衣装や家具などの装飾として広く親しまれています．しかし，石の方はキリの名とは縁が薄く，いくら探してもキリがありません．僅かに「菊桐紋石（きくきりもんせき）」を見つけましたが，これは「菊の石」の仲間ですので紹介は次回に廻し，今回はこの辺で目出度くキリということにしておきましょう．

文　献

遠藤祐二・加藤碩一（2000）：石の俗称　五穀の石．地質ニュース，no.547，p.36-40.
原田哲朗・編（1988）：紀の国　石ころ散歩．宇治書店．236p.
飯島　亮・加藤栄一（1978）：原色日本の石　産地と利用．大和屋出版．261p.
加藤碩一・遠藤祐二（1999）：石の俗称辞典．愛智出版．312p.
岡本要八郎（1956）：門司奇石　梅花石．門司市など．60p.

ENDO Yuji and KATO Hirokazu (2000)：Stone names related with flower cards.

＜受付：2000年5月30日＞